

羽村市史編さんだより

平成30年1月
第12号

伸びゆくはむら

特集

「刻付」からみる
江戸時代の情報伝達速度

2

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちゅとんべえ」

第8回 羽村市史編さん委員会を開催

11月14日（火）に開催された第8回羽村市史編さん委員会では、平成29年度刊行予定の『羽村市史 資料編 近現代図録』、『羽村市史 資料編 中世』について最終的な協議が行われました。各委員から出された意見をもとに調整し、校正へと反映していきます。

頒布の詳細など、決まりましたらこの紙面でご案内いたします。



▲第8回羽村市史編さん委員会の様子

第3回 羽村市史関連講座を行います！

『羽村市史 資料編 近現代図録』編集の際に収集および調査した地図や写真資料をもとに、羽村の地形と土地利用および大正・昭和・平成の景観や産業の変化とその背景についてひもときます。

～地図と写真に見る

羽村の大正・昭和・平成～

- 講師 浜田弘明さん
 （羽村市史編さん部会第3部会長/桜美林大学人文学系長・教授）
- 日時 3月24日（土）午後2時～4時
- 会場 生涯学習センターゆとろぎ 講座室1
- 定員 80人
- 参加費 無料

- ※直接会場へお越しください
- ※保育あります
- ※詳しくは、広報はむら3月1日号や公式サイトをご覧ください



▲昭和40年頃の羽村駅



表紙の写真 五ノ神社

JR羽村駅から徒歩1分、東口ロータリーに接する場所にひっそりと佇む五ノ神社。駅前にもかかわらず静かで、趣のある境内です。

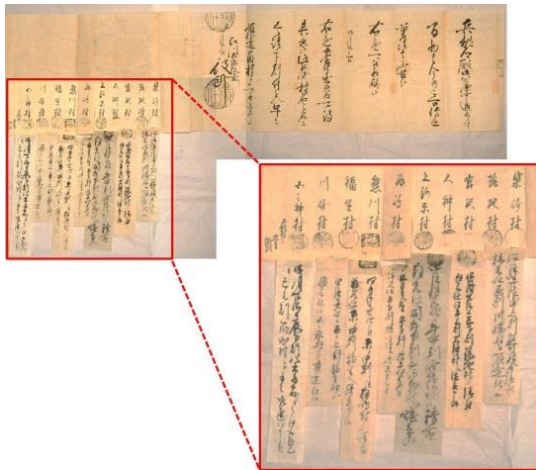
境内にはかつてあった大きな杉はもう存在しません。今は大きなイチヨウが季節ごとに姿を変え境内の演出を担っています。駅前までお出かけの際はぜひ足を運び、悠久の時の流れを感じてみてください。

「刻付」からみる江戸時代の情報伝達速度

こくづけ ●「刻付」とは？

江戸時代、領主が支配下の村へ命令を通達する方法の1つに「廻状」と呼ばれる文書がありました。廻状とは2つ以上の宛所に対して順次回覧させ、最後に発信者へ返送するよう作成した文書で、廻状が回ってきた村は内容を確認し、領主からの命令を記録する御用留・廻状留などに控えをとったのち押印し、次の宛所へと廻状を送っていました。この際、廻状には押印の他にも文書の発信・取扱い時刻などを添付する場合があります。このように文書が到着・発送した際に、その時刻を記録したものを「刻付」と呼びます。

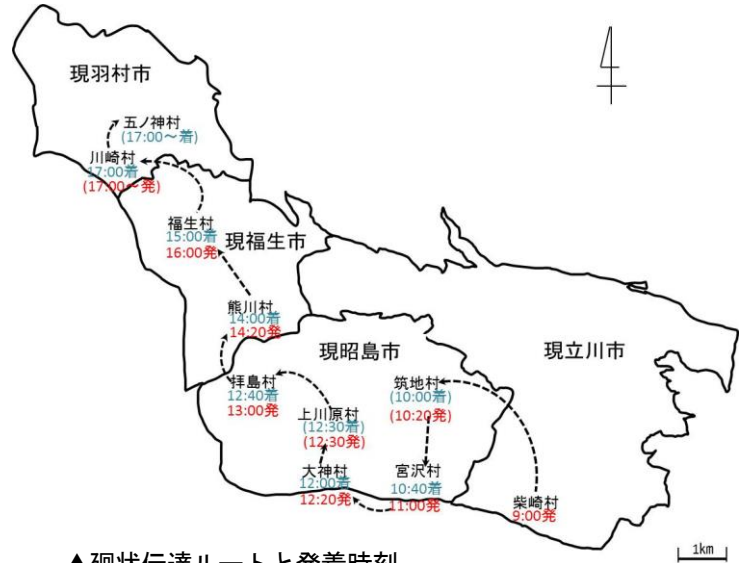
前述の通り、原本は領主へ返却するため村の控えに刻付の記録が残ることは少ないのですが、たまたま市内に残された史料には刻付の記録がされた廻状の原本が残されていました。これらの史料から当時の手紙が配送されるのにはどの程度時間がかかっていたのか見ていくことにしましょう。



▲回覧された廻状に添付された「刻付」

●「刻付」からみる文書の伝達速度

今回見ていく史料は「鳴物停止令」と呼ばれる史料に添付されていた刻付で、これは為政者の逝去に際して服喪のために鳴物（楽器の演奏）を一定期間禁止するという内容のものです。この廻状は柴崎村（現立川市）から五ノ神村（現羽村市）に至る10の村々に伝達されました。柴崎村から五ノ神村までの



▲廻状伝達ルートと発着時刻

※（）は前後の記事から類推した時刻

廻状の伝達ルートと発着時刻は上図の通りです。

廻状自体は領主の江川太郎左衛門の役所で4月23日に作成されたもので、最初の回覧先である柴崎村で添付された刻付から、それが八王子宿を經由し、翌4月24日の朝方9時前に到着していることが分かります。それから昼過ぎ13時頃には現昭島市に存在していた5つの村々への伝達を終え、熊川村・福生村（双方とも現福生市）で回覧されたのち、夕方には羽村市域に到達しています。川崎村から五ノ神村へ送られた時刻は不明ですが、日にちの変更が記載されていないことから同日中には伝達されていたものと考えられます。

今回の史料からは領主が発給した文書が翌日には関係村々へ伝達されていることが確認できました。発給された文書の内容や廻状の場合であれば回覧先の村数によって伝達速度は若干の違いが出ると考えられますが、現在の我々から見てかなりの速さで情報が村々へ伝わっていたことがうかがえます。

これからも村々の記録を調べていき、江戸時代の羽村市域の様相を明らかにしていきたいと思えます。

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。
※10～12月の活動をお知らせします。

用語の解説

みずばんにん

水番人…玉川上水の管理を現地で直接行った。羽村や四ツ谷大木戸など、計五ヶ所に配置。羽村の水番人は、水量の計測や調節、堰の見廻りなど多摩川の水が上水へ適切に流入する様に差配することを日常の業務としていた。

第1部会 ～原始・古代・中世～

『羽村市史 資料編 中世』の出典情報・所蔵者情報の整理を進めました。史料掲載のためのご承諾をいただくため、所蔵者の方々への手続きをはじめています。また、原稿校正に必要な国立公文書館所蔵史料の現物確認、写真複写を行いました。さらに、資料の出典確認のための補足調査を実施しました。

現在は初校の段階ですが、各部会員が分担しながら校正を進めています。

縄文班では、引き続きデジタルトレースなどの作業を進めました。



▲調査の様子

第2部会 ～近世～

第2部会では、来年度の資料編刊行に向けて調査・史料解読・データ化の作業を進めています。今回までに行った調査では、幕府の上水管理に関する役所の出張所である陣屋で作成された日誌や羽村堰が描かれた絵図類の調査を行いました。陣屋の日誌の中には、羽村の水番人が作成した日誌類と作成時期が重なっているものもあり、陣屋・水番人の双方から堰の管理・運営の動きを確認することができ、更に調査を深めていきたいと考えています。



▲東京都水道歴史館での調査の様子

第3部会 ～近代・現代～

『羽村市史 資料編 近現代図録』の校正作業を進めています。限られたスペースに、より多くの情報を掲載するため、解説文と写真のバランス、各写真の大きさなど、入稿後も調整作業を続けています。

さらに、年表や統計資料の確認作業も並行して行いました。

また、文字史料の確認調査も継続しており、郷土博物館収蔵資料や、東京都公文書館収蔵資料などの確認作業を実施しました。



▲校正のための資料確認の様子

第4部会 ～自然～

生態班で行っている哺乳類調査では、センサーカメラを用いた野生動物の観察を実施しています。夏から撮影を開始しているカメラには、出現した野生動物が写りこんでいます。右の写真は、草花丘陵に設置したカメラが11月20日の明け方にとらえたアライグマの姿です。他にはタヌキ、イノシシ、ノウサギなどが撮影されています。

地形・地質班は礫層調査の大詰めを迎えようとしています。気候班は過去の日記・日誌から天気に関する情報の収集を進めています。



▲センサーカメラの画像（アライグマ）

第5部会 ～民俗～

市内での聞き取り調査を継続的に実施しています。お話をお聞きするばかりでなく、古いアルバムなどを拝見させていただくこともあり、貴重な機会となっています。

これらの個別情報を共有するため、数か月に一度集まって、勉強会を行っています。

2月には、恒例の合宿調査も予定しています。

さらに、今年の春祭りの調査についても準備をはじめました。昨年は天候に恵まれず、一部の調査ができませんでしたので、今年こそはの思いです。



▲情報共有の勉強会の様子

市史編さんの足あと



※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
10月	5日(木)	⑤ 聞き取り調査(個人)
	15日(日)	羽村市史編さんだより第11号発行
	16日(月)	第11回羽村市史編さん本部会議
	23日(月)	④ 市内調査
	25日(水) 27日(金)	③ 庁内保管資料調査
11月	2日(木)	④ 市内調査
	14日(火)	第8回羽村市史編さん委員会
	21日(火)	① 市外史料調査(国立公文書館)
	27日(月)	⑤ 聞き取り調査(個人宅)

月	日	できごと
12月	1日(金)	① 資料調査(個人)
	6日(水)	④ 市内調査
	11日(月)	①② 市外史料調査(東京都水道歴史館・国立公文書館)
	13日(水)	④ 礫層調査(青梅市)
	20日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	22日(金)	① 出典史料確認調査(青梅市郷土博物館) ④ 気温観測データ(定点)の回収

コラム

ちっとなべえ

台風21号が通過した10月23日は、前日から降り続いた雨の影響もあり、多摩川は増水していました。川の水位は上がり、取水堰の投渡木は^{なぎ}払われ、普段の多摩川からは想像できないほどの水量と迫力でした。

昭和47年の秋、同じように多摩川が増水した記事が過去の広報はむらに掲載されています。台風がもたらした豪雨により、対岸の堤防が一部破壊され、日ごろは静かな多摩川も大暴れ、



▲荒れる多摩川 (撮影日: 10月23日)

第12回 「みずのまち はむら」

堰の投渡木もやはり取り払われていたとのこと。当時の写真からも、荒れる多摩川の様子が見てとれます。まさに今回の多摩川も、当時と同じ状態でした。

よく降った雨は、市内の崖線にもその影響を与えました。至る所で水が湧き出ており、小川のような水流のある“寺坂”、こんこんと湧き出す稲荷緑地の“弁天の泉”、水没する“まいまいず井戸”、境内からの湧水が山門前の階段まで溢れ出す“一峰院”。稲荷緑地周辺には他にも何ヶ所か水が湧き出ている場所があり、「雨の後はよく湧いている」と居合わせた近所の方が教えてくれました。

“花と水のまちはむら”。台風後に水に満ちた羽村を実感しました。(S.K 記)

※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。